

研究ノート

## ネパール北西部農村における人の範疇化 —援助と教育の広まりによる変化\*

岩間 春芽\*\*

### The Changing Social Categories in Relation to Foreign Aid and Education in a Village in North-Western Nepal

IWAMA Haruka

#### Abstract

This article examines the changing social categories in relation to foreign aid and education in a village in north-western Nepal. I attempt to explain the influence of the political reforms after the introduction of democracy in 1990 by considering the case of a remote village. In particular, I focus on the proliferation of NGOs and the spread of education. Since 1990, NGOs have proliferated throughout Nepal. In the village studied, NGOs are regarded as exclusively male workplaces. Some “educated and powerful” dominant caste men work there, and have thus become rich. This situation created a new hierarchy. The new policy offered women educational opportunities, thereby creating another new hierarchy: “educated women” and “illiterate women.” Moreover, education is related to work and attire. Villagers think “educated women = office work = “kurta”” and “illiterate women = physically demanding work = “dhoti.”” Thus, in the village, new hierarchies are created: (1) hard work and easy work, (2) educated workers and illiterate workers, (3) highly paid jobs and badly paid jobs. Hence, when the above hierarchies are integrated with the caste-based hierarchy, a complicated power structure can be observed.

#### 要旨

本論文ではネパール北西部農村における人の範疇化の変化について述べる。ネパールの1990年の民主化による政策の変化が調査村にどのような変化をもたらしたのか、というのが本論文の問いである。特に本論文では1990年以降のNGOと教育の広まりに着目する。調査村において

\* 本研究は、2007年4月から2009年3月まで、平和中島財団日本人奨学生として、筆者がネパールに滞在した間に行った現地調査に基づいている。また、2010年10月以降の調査研究は松下幸之助記念財団の助成を受けて可能となった。この貴重な機会を与えていただいた両財団に対し、ここに深謝の意を表したい。

\*\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程

・ 2007、「(書評) 上田晶子『アータンにみる開発の概念—若者たちにとっての近代化と伝統文化』、明石書店、2006年」、『アジア・アフリカ地域研究』7-2、268-271頁。

NGOは主に男性の雇用先として捉えられ、「教育があり、裕福で権力を握る」一部のドミナントカーストがNGOで働くことで彼らとそれ以外の人達という序列が生じた。また、教育の広まりにより、「教育を受けた女性」と「教育のない女性」という序列が生じた。教育は仕事や服装とも深い関わりを持ち、「教育のある女性=オフィスワーク=クルタ」「教育のない女性=重労働=ドティ」という認識が広まった。調査村では①大変な仕事をする人とラクな仕事をする人、②教育がある仕事をする人と知らない仕事をする人、③お金が得られる仕事をする人と得られない仕事をする人の3つの序列がそれまでのカーストの序列と重なり、交錯した人の範疇化が生じてきている。

### 1. はじめに

本論文ではネパール北西部農村における調査村の人たちによる人の範疇化の変化について述べる。ネパールでは1990年の民主化以降、国全体に様々な形で開発が広まった。そのような政治的な変化が僻地農村にどのような変化をもたらしたのか、というのが本論文の問いである。特にNGOの増加と教育の広まりという二つに注目して論じる。「ネパールのどの村にも学校はあり、人類学者と先生と援助関係者が顔を合わせる」というフィッシャーの指摘[Fisher 1990: 30]からわかるように、ネパール農村で近年生じている変化は、教育と援助と深く関わっている。ネパールでは開発政策が行き届かず、電気や車道、灌漑などのインフラが普及していない村が少なくないが、そういった僻村であっても学校はあり、NGOが入っている。よって、NGOと教育の事例を述べながら、調査村における人の範疇化がどのように変化したのかについて論じる。NGOで働くのは多くが男性であるため、前者は男性中心に生じている変化である。近年の教育の広まりは主に女性の間でみられる変化であるため、後者は女性中心に生じている変化である。これら二つを見ることで男性、女性両方の中で生じている変化をみる。

### 2. 調査村概要

ここでは、本論文を理解する上で必要な前提として調査村の概要を示す。調査は2007年から2009年にかけて、計15か月の間単独で行い、全世帯のサーベイをふまえ、12世帯の重点的な調査と農作業などへの参与観察を行った。その調査結果をもとに本論文は書かれている。調査村はネパール北西部に位置する標高約1,900mの村である。郡庁所在地のあるバザールまで徒歩15分、隣の郡まで開通した平野部まで続く車道の終点から約100km、チベット国境までは徒歩3、4日の所に位置する。調査村には278世帯、1,787人が住んでいる。ヒンドゥー教のパルバテヒンドゥ（パハディ）<sup>1)</sup>のハイカーストであるチェトリとタクリ<sup>2)</sup>、ダリットのカミ、サルキ、ダマイが混住しているが、最上位のパファン（ブラフマン）や他の民族は住んでいない。チェトリとタクリが調査村の人口の85%を占めるドミナントカーストである。調査村の99%の世帯が自給自足に近い農業を営んでおり、44%

が給与生活者（政府関係機関や NGO の職員）と兼業している。給与生活者以外の現金収入源となる仕事としては、大工（51 世帯）、楽器の演奏（26 世帯）、農具の製作と修理（14 世帯）、小規模商店（12 世帯）、蒸留酒の製造と販売（11 世帯）、仕立て（11 世帯）、食堂（8 世帯）、ラバでの荷運び（7 世帯）、出稼ぎ（6 世帯）、大家（6 世帯）、鍛冶屋（3 世帯）、靴の製作（3 世帯）、看板かき（2 世帯）、助産師兼保健師（2 世帯）がある<sup>3)</sup>。農産物や家畜の売買をして現金収入を稼いでいる家も 39%あり、その中で多いのがヤギの飼育とリンゴの栽培である。チェトリはダリットよりも多く土地を所有する傾向にあり、自ら小農として自給自足的な農業を営んでいる家もあれば、ダリットや一部のチェトリを農業労働者として雇い、人手が足りない時に農業労働をさせる家もある。ダリットはカーストの仕事と小規模の農業を基本的な仕事とし、家庭によって大工や農業労働などを組み合わせて生計を立てている。カミは鍛冶屋仕事で主に金属製の農具の製作や修理をし、サルキはジャラライロ<sup>4)</sup>の製作と修理、ダマイは儀礼での楽器の演奏をし、その見返りとしてチェトリが穀物や現金を払うというカースト間関係がある。ダマイはバザールや都市で売られる安価な中国製の既製服の影響で服の仕立ての仕事を失いつつあり、そういった形での変化はみられる。調査時においても近年のマオイスト支持者は増加しているが、基本的なカースト間関係という社会関係の変化はみられない。

### 3. NGO の出現による変化

#### 3.1. カーストによる人の範疇化と NGO の出現による変化

調査村においてかつて支配的であったのはドミナントカーストに属する人たちであり、そこにはカーストによる上下関係が存在した。この関係は調査村の隣の郡において約 30 年前に調査を行ったベネットの研究から知ることができる [Bennett 1983: 9]。そのころ、ドミナントカーストは土地を比較的多く所有し、ダリットは土地を少なく所有する、という違いはあったが、どちらも生活を成り立たせる仕事は農業であり、必要に応じてカーストの仕事をするという形で生計がたてられていた。

そのころは現在のように多数の NGO はなく、オフィスワークの機会が政府関係機関に限られ、オフィスワークをする人たちは政府関係機関で働くごく一部の人のみであった<sup>5)</sup>。オフィスワーカーはドミナントカーストの特定の親族で占められていた<sup>6)</sup>。このころからドミナントカーストの政府関係機関の職員は社会的に上であると考えられてきた。それは、彼らがダリットと比較すると学歴があり、安定した現金収入があり比較的豊かであることもあるが、何よりも権力を握っているためであった。

このようなカーストによる人の範疇化は NGO の増加により変化してきた。この地域に限らず、ネパール全土において NGO が設立されたのは、主に民主化した 1990 年以降である。1990 年の民主化以降、NGO は増加の一途をたどり毎年 1,000 から 2,000 団体前後が創設され、2009 年現在では国全体で 2 万 7,000 を超えている [Social Welfare Council 2009]。調査村のある郡のみの団体数の推移についてのデータはないが、2009 年までに郡内に 100 を超える団体が登録されている<sup>7)</sup> [Social Welfare

Council 2009]。大規模なインフラ整備が行われてこなかった僻地であっても NGO は存在し、社会関係に大きく影響を与える存在となってきたのである。

このような NGO 増加の流れの中で、NGO に関する研究もなされてきた。既に述べたように C. シュレスタはネパールの NGO において調査をし、NGO ではそれまでの政府関係機関でみられたようなドミナントカーストのアフノマンチェ<sup>8)</sup>だけで占められた社会関係ではなく、カーストや民族、親族家族とは別の、何のコミュニティにも属さない、「人のために働く」新しい社会関係が作られているということを指摘している。本来、NGO は企業のように利益のために働くわけでもなく、政府のように自国の利益のために働くのでもない、「良いこと」<sup>9)</sup>をする新しい理想的な組織として考えられてきた [Fisher1997: 442]。これは全世界に共通の認識であり、ネパールにおいても、C. シュレスタが調査を行ったような地域、NGO では共有されている考え方ようである。

しかしながら、調査村において NGO の仕事は「人のために働く」「良いことをする」のではなく、給料をもらうためやるものであり、都市や外国などのヘッドオフィスから来る指令に適当に従うだけのものである。

例えば調査村に住むチェトリのアラス・ラワル (33 歳) はバザールにあるローカル NGO の職員として働いている。29 歳の妻との間に娘 3 人 (12 歳、9 歳、3 歳) と息子 1 人 (6 か月) がいる。彼は外国人やヘッドオフィスの言うことに従い、別の村で「男女が平等に働くこと」や「女の子に家事をさせず学校に行かせること」などを指導に行っている。しかし、彼の子供たちは一応近隣の公立の学校に通っているが、私立のボーディングスクールには通っていない。NGO での給与は月 1 万ルピーを超える高給であり、子供たちをボーディングスクールに行かせるだけの経済的余裕は充分にあるはずであるが、女の子なので行かせる必要性を感じていない。長女はかなり頻繁に母親の農作業を手伝わされており、母親が男の子を出産した後数カ月は、母親に代わって毎日農作業をこなすのではなく、その間ずっと学校に行けなかった。農作業を農業労働者を雇ってやらせるだけの経済的余裕はあり、実際父親自身が忙しく農作業ができない時は代わりに農業労働者を雇ってやらせている。しかし、長女に関してはそうは思わず、数カ月の間学校に行けないことについては何の問題も感じていない。筆者が水汲みを女の子達だけがやっている理由を尋ねると、「一体何が悪いっていうんだ。子供はこれくらいの仕事しかできないからやらせているんだ」と半ば怒ったような口調で答えた。筆者は責めることを全く意図せずそういう口調でもなかったのだが、こういう答えが返ってきた。こういった態度をとる半面、自分の NGO のプロジェクトが終わり失職しそうになった時は、困ったような顔を作りながら「NGO を作って仕事をくれ」と何度も繰り返し言ってきた。このような彼の行動から、彼は自分が他の村で指導していることに納得しているわけではなく、NGO に雇用され、お金を得るために表面的に従っているだけということがわかる。彼にとって外国人や NGO のヘッドオフィスの言うことは「納得も共感もできない、現実離れた余計なこと」である。彼のような姿勢—生活のために援助を利用しようとする姿勢—は頻繁にみられる。つまり、この地域にお

ける NGO は 1990 年以降に生じた新しい組織ではなく、単に高給の貰える雇用先として捉えられているのである<sup>10)</sup>。

NGO での仕事はそれまでにあった政府関係機関の職員の仕事と同類として捉えられており、比較的豊かなドミナントカーストの家庭出身者が多い<sup>11)</sup>。ドミナントカーストであれば NGO での雇用が得られやすいという風に、ドミナントカーストが権力を保持する構造を再生産するという構造は政府関係機関も NGO も同じである。以前はカーストによる上下関係であり、それは現在もなくなっていないが、近年広まった教育、開発、という新たな尺度が加わり補強され、教育、開発があるドミナントカーストは上で、教育や開発がないダリットは下という社会関係が再生産されている。つまり、NGO が既にあったカースト間関係を再生産し、ドミナントカーストの「アフノマンチェ」によるコネ社会を継続し更に補強しているのである。確かに NGO は形としては 1990 年代以降できた新しい組織である。しかし、NGO はあくまで調査村の文脈の中、コネ社会の中にあるものであり、権力があるために経済的にも力を持つドミナントカーストが存在し、コネによりそれが世代を超えて引き継がれていくのである<sup>12)</sup>。

このような現状を表す例として、パンチャバハドゥール・バムの家と、バウデ・バムの家が挙げられる。これら 2 家族はどちらも 3 世代同居で成員も類似している。パンチャバハドゥールの家ではラバでの荷運びとヤギの飼育をして生計を立てている。バウデの家では祖父が森林局で公務員として働いていたため、そのコネで息子達も皆公務員や NGO 職員として働いている。この 2 家庭の息子たちの学歴に大差はないのだが、パンチャバハドゥールの家にはコネがないため、給与生活者の職が得られず、ある程度の現金収入は稼げるが、肉体労働を伴う仕事をせざるを得ない。逆にバウデの家では祖父の代から続くコネがあるため、息子たちは際立って高学歴というわけではないのだが、皆給与生活者の職が得られている。職が得られるか否かだけではなく、援助米の配給や、化学肥料や携帯電話など外部で製造されて売られるものが不足しているときにも差が生じる。バウデの家では何の問題もなくそれらが得られるが、パンチャバハドゥールの家では一日並んで待っても得られない。バウデの家では祖父や父親はサール<sup>13)</sup>と呼ばれ、かなり高圧的な態度をとり、体を動かすような仕事はしようとせず、嫁や農業労働者などに命令してやらせる。一方、パンチャバハドゥールの家ではすべての作業を自分たち家族で行っている。パンチャバハドゥールの家族はこのような状況を不満に思っており、可能ならば「ラク」で高給が得られる NGO で働きたい、化学肥料なども公平な形で手に入るとよいと考えているのだが、コネと権力がないため現状を変えることはできないとあきらめて、SLC<sup>14)</sup>に合格した息子も給与生活者として雇用される可能性が低いと判断し、父親の仕事を手伝い始めている。このように、権力や理想的な職である給与生活者の職が世代を超えて受け継がれ、格差を生んでおり、NGO 職員という職もまた、その中の一部として捉えられているのである。

### 3.2. 「ラクな仕事」先としての NGO

調査村において、NGO 職員の仕事はしばしば「ラクな（サジロ）仕事」と言われている。ここでいう「ラクさ」とは、具体的には肉体労働ではないオフィスワークを指す。バフンなどのハイカーストで政府関係機関の上の地位で働く人はきつい肉体労働を嫌い避ける傾向というのは、以前からあったものである<sup>15)</sup>。ハイカーストにとって体を動かして働くことはきつい、つらい（ドゥッカ）ことでしかなく、価値のない避けるべき仕事である。逆に体を動かさないオフィスワーク（ジャギル）はラクな仕事であり理想的な仕事である。ハイカーストは自分で体を動かして働くことを恥ずかしと感じ、下のカーストに命令してやらせる、仕事があまくいかなければ反省するのではなく他を批判するという横柄な態度が自らの立場に適切であると考えている<sup>16)</sup>。

近年、開発が広まってからは、教育のある人が社会的に上の立場にあると捉えられるようになり、彼らもハイカースト同様、きつい肉体労働を嫌い避けるようになった<sup>17)</sup>。その結果として、自ら農作業をすることを当たり前と考えてきたチェトリでさえも、NGO 職員や政府関係機関の上のポストにあるなどして社会的地位が高ければ、体を動かして働くことを避けようとするようになった。そのため、近年の NGO の増加により NGO がラクな仕事で高収入をもたらす雇用先として期待されるようになり、「椅子に座っているだけでつらい思いをして働かなくても、コネさえあれば高給が得られる」という考え方がそれまで以上に広まったのである。

## 4. 教育の普及と女性の服装の変化

### 4.1. 教育による女性の範疇化

次に女性が教育という指標で序列化、範疇化しているということについて論じる。その前提として、まず、調査村で教育がどのように広まってきたのか見ていく。

ネパールで近代教育が始まったのは開国後の 1951 年以降と言われている。それまでのラナ政権下では教育の一般化は阻止されており、開国以前のネパールの識字率は 2% に満たないものであり、小学校の就学率もわずか 1% 程度であった [長岡 2000: 129]。開国してからは教育省設置、教育法制定などが行われ、近代教育が一般にも広められるようになった。開国直後はハイカーストの男子のみの教育をしている学校がほとんどであった [Levine 2006: 22-23]。しかし 1962 年に憲法にすべての人に教育の権利があることが明記され、さらに 1971-1976 年の新教育制度計画 (The New Education System Plan: NESP) は男子と女子の教育機会を平等に与えることを明記したものであったため、教育の普及を大きく前進させた [Levine 2006: 23]。1980 年代には UNESCO の援助のもと、教育制度改革がなされ、主に女子の就学率を上げるための取り組みがなされた。1990 年には民主化に伴い、教育が十分に広がっていない農村部やダリット、民族、女子全てに教育を広める努力がなされ始めた [Levine 2006: 24]。これ以降、それまで学校のなかった僻地にも小学校と中学校が作られ始め、ネパール各地に国立トリブバン大学の分校も設置された。同時に、私立の小学校や中学校（通称ポー



ディングスクール)も作られはじめた。これらの学校は学費、制服代、教科書代などがかり公立に比べるとお金がかかるが、比較的裕福な家庭では英語教育重視のこれらの学校へ子供を通わせるようになった [Levine 2006: 25]。このような変化の中でネパールでは 1990 年代から初等教育の就学率は驚くほど向上し、男女差も縮まった [菅野 2008: 4]。

調査村においても、ネパール全体とほぼ同じような変化が生じてきた。調査村での教育に関する資料は残っていないが、調査村の人たちの経歴を見ていくと、20 代以上だとチェトリの男性のみが教育を受けており、それ以下となるとダリットやチェトリの女性も教育を受けており、2009 年現在は 20 歳以下の子供のほとんどはほぼ毎日学校に通っているという状態である。調査村には 5 年生までの公立の学校が 1 校と隣の村に 8 年生までの公立の学校の村が 1 校あり、バザールには 9 年生以上の公立の学校があり多くの子どもたちはそこに通い勉強する。バザールには数年前ボーディングスクールが 2 校でき、2008 年にはトリブバン大学の分校も開校し、調査村からこれらの学校に通うものもではじめている。国一番の僻地であらゆるインフラが欠如しているこの地域においても、学校教育は普及してきているのである。

このような教育の普及に伴い、調査村における人の範疇化もまた変化してきている。調査村において教育とは開発のレトリックを教え丸暗記させるものである。「教育のある人」とは学校教育をより長く受けた人を指し、調査村に多くいる非識字の人たちと対照的な存在と認識されている。調査村の人たちの間には「教育のある人」は「近代的であり」「開発されており」「科学的であり」「進歩的である」という見方があり、実際「教育のある人」は自分たちに必要か否か、本当に正しいかどうかを考えずに盲目的にこの価値に従う。例えば学校で家族計画や森林保全が正しいことである、と教われば、自分たちの実際の生活に必要なかどうか考えずに、盲目的にそれに従う。そして「教育のある人」たちは「教育のない人」は「伝統的」であり「迷信を信じ」、「保守的」であるとし、否定的に捉え、彼らを下位に見る<sup>18)</sup>。このような見方がベースとなり、調査村では開発に従う「教育がある人」と「教育がない人」の序列が生じるのである。

確かに、1990 年以降、教育はそれまで教育が受けられなかった女性やダリットにも広まり、より多くの人々が教育を受ける機会を得られるようになってきた。しかし、教育が広まることにより、「教育がある人」と「教育のない人」という立場の違いが生じ、新たな序列化、範疇化が生じているのである<sup>19)</sup>。

教育と仕事や服装は密接な関係がある。すでに述べたように、「教育がある人」でかつコネのある人は公務員や NGO 職員として働き「ラクな仕事」であるオフィスワークを行う。女性であればクルタを着ている。一方、「教育のない人」、「教育はあるがコネがない人」は「大変な仕事」である肉体労働—農作業やマキ運び、大工など—を行う。女性であればドティを着ている。開発が広まる前は、肉体労働はほとんど全員が小さいころからやる、当たり前の仕事だった。服装もほとんど違いがなかった。しかし、開発が広まり、教育のある人とない人が生じ、オフィスワークをする教育を受け

た人という存在が生じた。この教育と仕事の関係は特に女性の間で明らかに見て取れる。すでに述べたように、女性の間で教育が広まったのはここ15年くらいの間ことであり、世代により教育レベルに大きな差があり、その差が服装にも反映されているからである。

#### 4.2. 換喩としての服装—クルタとドティ—

ここまで述べてきた仕事と教育による序列化において、調査村では女性の服装<sup>20)</sup>が換喩になっている。調査村ではドティ、クルタスルワール（以下クルタ）が主に着られているがまれにサリーや洋服もみられる。序列化の換喩となっているのはドティとクルタである。ドティは既婚の大人の女性が着るものとされており、「教育のない」農作業などをして働く女性が着るものとも解釈されている。一方、クルタは勉強をする女の子やオフィスワークなどをして働く「教育のある」女性が着るものとされており、実際にある程度の学歴のある人たちが着ている<sup>21)</sup>。

女の子達がクルタを着る理由は「勉強するのに都合がいいから」と説明される。しかし、女の子たちに具体的にどのように都合が良いのか聞いてもはっきりとした答えは返ってこない。それは、この服がもともとパンジャブ地方の民族服であり、教育とは特に何の関係もなかったことから納得できる。クルタと学校教育が結び付けて考えられるようになったのは、「教育のある」学校の女の先生たちやオフィスワークをして働いている女性たちがクルタを着ているため、その影響で、教育がある人が着る服として考えられるようになったためと思われる。クルタは女の先生や政府関係機関やNGOで働くオフィスワーカーなど、村外出身の教育レベルの高い人たちが、この調査村で生まれ育って10年生以上で学ぶ女の子たちによって着られている<sup>22)</sup>。対照的に学校に行っていない、農作業をする女性たちはドティを着ている。つまり、彼女らの服装は開発や学校教育の換喩となったのである。調査村に限らず、ネパールでは服装でその人の社会的地位や民族、カーストを認識しあう。この現象はネパールに以前からあった傾向である[Hepburn 2000: 280]。この認識の仕方の中に、クルタを着た「教育のある」女性という新しい存在や、それと対照的な「教育のない」ドティの女性という存在もが組み込まれ、新たな社会的地位とそれを表す服装が出現したのである。これは単に学校教育を受けたかどうかという事実のみならず、本人達の認識が反映されるのである。すなわち「教育のない」女性＝荷運びや農作業をする＝ドティなどを着ている、「教育のある」女性＝オフィスワークをする＝クルタを着ている、と女性達自らが自分達を新しい「学校教育の有無」という尺度で範疇化し、それぞれが自らをそのどちらかであると認識しはじめたのである。

例えばログノ・ラワル（10歳）は5年生の女の子で、学校では制服を着て、家にいるときはクルタを着ている。その一方、彼女の姉（20歳）や母（36歳）は学校に行っていないことがなく、毎日ドティを着て農作業や家事をしている。ログノに「大人になったらクルタを着るのか、それともお母さんたちのようにドティを着るのか」と尋ねたところ、彼女は「私は5年生まで学んでいてお母さんたちとは違うから、クルタを着る。ドティなんか着ない。」と見下したような口調で答えた。逆にほと



んど学校に行ったことのない女性たちにドティを着ている理由を尋ねたところ、「私は教育がないからクルタを着ていたらみんなにおかしうて言われる。だからドティを着るの」と答えた。このことから、教育の有無で服装が決まるということは調査村の多くの人たちに共有されている認識であり、皆自分が「教育がある人」であるか「教育がない人」であるかを判断しながらドティかクルタかどちらかを選び、着ているということがわかる。

しかし、調査村の一部にこの序列化をすんなりと受け入れようとしない人たちもいる。実際、クルタを着た女性たちは、既に述べたように自分たちは「教育がある人」であり、社会的に上の立場にあると自負している。しかし、こういった状況があっても、ドティの女性達が学歴がなく、社会的地位も低い自分達をさげすむ姿勢はあまり見られない。普段の生活には文字の読み書きは必要なく、それよりも農作業や家事ができるかどうかのほうが大切であり、嫁や母としての立場もそれらができれば十分に保障されるものである。そのため、一部の誇り高い女性達は、自ら新たな言説を作り出し、言い広めることで自分の立場の上昇を図っている。彼女たちは自分たちが「教育がない人」であることを認めながらも、下に見られたくないためか、「自分たちは「教育のある」都市の人や外国人ができないような重い荷運びができる」ということを自慢げに語る。この地域で生まれ育てば、車道がなく自動車などの重い荷を運ぶものがないために重い荷を運ぶ必要があり、重い荷が運べることは特別な技術ではなく、子供のころからやっていて誰でも出来ることである<sup>23)</sup>。また、重い荷を運ばなくてはならないということは車道などのインフラがないということであり、「開発がない」ということと同義である。このことは開発を肯定的に見る「教育のある」人たちにはむしろ否定的にうつる。それにもかかわらず、彼女たちが「重い荷運びができる」ということを、あえて誇らしげに語り、「荷運びができない」村外の人たちを見下そうとするのは、教育の有無により序列化が進み、自分たちがいつの間にか下の立場に置かれてしまったことへの抵抗なのではないかと考えられる。教育の有無による序列化、新たな範疇化が進む中で下位におかれてしまったドティの女性たちがそれを覆すために、特別なことではない荷運びを特別な能力のある人にしかできないように思わせるような言説を言い広め、抵抗しはじめたのである。しかし、彼女たちであっても開発言説を完全に排除して生活しているわけではない。「私は（都市の人や外国人にできないような）荷運びができる。」と誇らしげに語る中年の女性は、その一方で「自分の息子は開発のある都市のボーディングスクールで小さいころから教育を受けた。この村の他の子供たちよりも教育があるのだ。」と誇らしげに語る。この発言から、この女性は教育（開発）の有無の序列を完全に否定しているわけではなく、内面化もしているということがわかる。教育の有無による序列と、それに相反する重労働を特別な仕事として上に見ようとする序列という二つの尺度をその場その場で使い分けているのである。

## 5. 結論

これまでみてきたように、近年調査村の人達による自らや周囲の範疇化に変化が生じており、女

性の間では服装がその換喩となっている。これは大きく分けると次の3つにまとめることができる。

- ① 大変な仕事をする人と、ラクな仕事をする人の範疇化（教育による序列化）
- ② 教育がある仕事をする人、いない仕事をする人の範疇化（教育による序列化）
- ③ お金が得られる仕事をする人、得られない仕事をする人の範疇化（裕福さによる序列化）

このような新たな範疇化が、それまでのカーストによる範疇化を全て変えてしまったわけではない。いまだカーストによる人の範疇化は存在し続けているが、それにさらにこれら①～③が加わり、既にあった社会関係を脅かしつつも強化するという複雑な状況となっている。

ドミナントカーストが権力を保持し続けているという全体としての傾向はあるが、実際にドミナントカーストで、これら①～③を全て持ち合わせている人はそれほど多くはなく、権力を保持し続けてきたドミナントカーストもまた、絶対的な存在ではない。新たな範疇化において上位にいられないドミナントカーストが下位に下がるという形で、権力が脅かされている面もある。例えば、ドミナントカーストで教育があり、NGOで働く（ラクな仕事をして高給を得る）という形で、これら全ての基準において上位にある人がその経済力と権力をアフノマンチュェだけに与え、それまでの社会関係が更に補強される状況がある一方で、教育はあるがコネがなく収入が低いドミナントカーストや、ダリットだがカーストの仕事の腕がよく現金収入の多い家族、「教育のある」ダリットの青年などそれまで見られなかった尺度で下位、上位におかれるようになった人たちもおり、新たなヒエラルキーの尺度が持ち込まれたことでドミナントカーストの権力が脅かされつつも強化されているのである。そして、この関係は今後さらに複合的な関係に展開すると思われる。

特筆すべきなのは、1990年に生じた民主化は機会や権利の平等を目指したものであり、NGOの増加や教育の普及もそれに伴う政策の変化から生じたものだったということである [Bista 1992: 113]。本来機会や権利の平等を目指すものであった民主化が、20年近くを経て本来の目的を達成するというよりも逆に、収入や教育による格差の拡大、新たな人の範疇化を生じさせることとなったということは、おそらく1990年当時誰も想像できなかった結果であろう。マオイストはNGO職員が比較的恵まれたドミナントカーストの職員に限られ、彼ら自身に利益を与えているだけで本来の目的の達成をできていないとし、否定的である [Ulvila and Hossain 2002: 155-156]。マオイストが生じた原因は諸説あるが、このようなNGOの現状も近年のマオイストの台頭の一因となっているのではないだろうか。

## 註

- 1) バルバテヒンドゥ（バハディ）とはヒンドゥー教徒でネパール語を母語とし、ネパール全体で多数派を占めるカースト集団である。旧王室や政府関係者に多く、他の民族よりも支配的な地位を占めている [ビスタ 1982: 1]。
- 2) チェトリとタクリはどちらもハイカーストでクシャトリアにあたる。両者の違いは諸説あり明らかでない [ビスタ 1982: 25]。

- 3) これらは農業兼蒸留酒の製造と販売兼ラバでの荷運びのように兼業されており重複しているため、パーセンテージで示すことはできない。また、それぞれの仕事を行う頻度や収入にも大きな違いがある。
- 4) 木製の農具。木の細い棒を並べて水牛の革の紐で結び合わせたもので、シコクビエの脱穀に使用する。水牛の革を使っているため、この製作がサルキの仕事となっている。
- 5) 隣の郡で調査をしていたベネットの民族誌の中には NGO は全く登場しないこと、また後述するように 1990 年以前はネパール全体として NGO が少数しか存在しなかったことから、このころ NGO がほとんどなく、そこで働く人たちがほとんどいなかったということがうかがい知れる。
- 6) カプランとビスタによる指摘がなされている [Caplan 1972: 50; Bista 1992: 96]。
- 7) Social Welfare Council (以下 SWC) によると、ここでのデータは SWC で登録した団体に限られる。よって、登録していないが何らかの活動をしている団体がある可能性もある (例えば国際 NGO がその地域のローカル NGO と提携を結ばずに、短期にその郡を訪問するという形で活動を行っていたとすれば、そのことはその地域の人には認知されていたとしても、SWC の記録には残らないということとなる。) また、登録したがそれ以降活動を停止、休止した状態にある団体も多数存在すると言われている。しかし、活動を停止、休止したとしてもそのことを申し出る義務はないため、SWC がそれを把握することは難しく、実際に活動を続けている団体がどのくらいあるのかについてを知ることは難しい。NGO はできては消えていく団体が多く、それらを把握しきれないということは SWC に限った問題ではないため、NGO についてのデータを完全に把握することは困難である。そのため、ここであげるデータは完全なものではない。
- 8) アフノマンチェとは直訳すると「自分の (側の) 人」となり、具体的には家族や親族、親しい友人などで自分自身をサポートしてくれる人を示す [Bista 1992: 67, 98]。
- 9) NGO が「良いこと」とすることは、ある人にとっては良いことかもしれないが、他の人にとっては害があることである可能性もあり、必ずしも良いことではないという指摘、つまり NGO が独善的になる可能性の指摘は既になされている [Fisher 1997: 442]。
- 10) これは、ピグヤナンダ・シュレスタの指摘に通じる [Pigg 1992: 50; Shrestha 1993: 15]。
- 11) NGO 職員の多くは都市の中流階級であり、地方で働く職員は村では裕福な家庭出身の者が多いということは C. シュレスタによっても指摘されている [Heaton-Shrestha 2004: 43]。ネパールの他の地域には FEDO (The Feminist Dalit Organization) や BASE (Backward Society Education) のような一部例外もあるが、それ以外の大半の NGO 職員の多くはバフンヤチュトリなどのドミナントカーストであるという点も C. シュレスタによって指摘されている [Heaton-Shrestha 2004: 43]。
- 12) ナンダ・シュレスタは「開発は教育があり権力があり裕福な階級とそうでない階級を作り出す [Shrestha 1993: 9]」という指摘をしているが、それがまさに当てはまる。
- 13) 英語の sir が語源と思われる。敬意を払う必要のある上の立場の人に対して使われる。
- 14) School Leaving Certificate の略称。10 年生まで学んだ後に受ける試験で、合否でそれ以降の進路が決まる。
- 15) ナンダ・シュレスタにより指摘されている [Shrestha 1993: 11]。
- 16) ビスタにより指摘されている [Bista 1992: 81]。
- 17) ナンダ・シュレスタも同様の指摘をしている [Shrestha 1993: 11]。
- 18) スキナーとホーランドによっても指摘されている [Skinner and Holland 1996: 282]。
- 19) スキナーとホーランドによっても指摘されている [Skinner and Holland 1996: 274]。
- 20) 男性は女性よりも世代による学歴の違いが小さく、服装も教育や世代による違いはそれほど大きくない。よってここでは取り上げない。

- 21) このような単純な二分は生じていないのではないか、という意見もあるかもしれないが、実際に女性たちはクルタカドティのどちらかを着ており、それ以外の服装はほとんど見られない。
- 22) 南は「村にはクルター・スルワールを持っている女性は一人もいない [南 2005: 99]」と述べていることから、この現象は比較的新しいものであると思われる。南はかつて村にはなかったクルタスルワールが1960年代から開発プロジェクトに携わる女性たちによって着られるようになり、外国人ボランティアにも着られてきたという指摘をしている [南 2005: 98]。
- 23) ナンダ・シュレスタにより同様の指摘がなされている [Shrestha 2003: 10]。

### 参考文献

- 菅野琴、2008、「ネパールにおける女子の基礎教育参加の課題—ジェンダーの視点から」、『ジェンダー研究—お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』、第11号、1-21頁。
- 長岡智寿子、2000、「ネパールの教育開発についての一考察—Non-Formal教育の事例を中心に」、『ヒマラヤ学誌』、第7号、127-142頁。
- ビスタ、D. B.、田村真知子（訳）、1983、『ネパールの人びと』、古今書院。
- 南真木人、2005、「クルター・スルワールの流行とその含意—ネパールのファッション」、杉本良男・三尾稔・国立民族学博物館（編）『装うインド』、千里文化財団、98-99頁。
- Bennett, L., 1983, *Dangerous Wives and Sacred Sisters*, New York: Columbia University Press.
- Bista, D. B., 1992, *Fatalism and Development*, Hyderabad: Orient Longman.
- Blaikie, P. M., J. Cameron and D. Seddon, 2005, *Nepal in Crisis*, Oxford: Clarendon Press.
- Butterworth, B., 1990, "Social Change and Educational Relation in Nepal: Reflections from an Educational Development Perspective," *Himalayan Research Bulletin*, 10-2/3, pp. 35-36.
- Caplan, A. P., 1972, *Priests and Cobblers*, Kathmandu: Mandala Publications.
- Fisher, J. F., 1990, "Education and Social Change in Nepal: An Anthropologist's Assessment," *Himalayan Research Bulletin*, 10-2/3, pp. 30-34.
- Fisher, W. F., 1997, "Doing Good? The Politics and Antipolitics of NGO Practices," *Annual Review of Anthropology*, 26, pp. 439-464.
- Heaton-Shrestha, C., 2004, "The Ambiguities of Practising Jat in 1990s Nepal: Elites, Caste and Everyday Life in development NGOs," *South Asia: Journal of South Asian Studies*, 27-1, pp. 39-63.
- Hepburn, S., 2000, "The Cloth of Barbaric Pagans: Tourism, Identity, and Modernity in Nepal," *Fashion Theory*, 4, pp. 275-300.
- LeVine, S., 2006, "Getting in, Dropping out, and Staying on: Determinants of Girls' School Attendance in the Kathmandu Valley of Nepal," *Anthropology & Education Quarterly*, 37-1, pp. 21-41.
- Pigg, S. L., 1992, "Inventing Social Categories through Place: Social Representations and Development in Nepal," *Comparative Studies in Society and History*, 34-3, pp. 491-513.

- Shrestha, N. R., 1993, “Enchanted by the Mantra of Bikas: A Self-Reflective Perspective on Nepalese Elites and Development,” *South Asia Bulletin*, 13-1/2, pp. 5–22.
- Skinner, D. and D. Holland, 1996, “Schools and the Cultural Production of the Educated Person in a Nepalese Hill Community,” in B. A. Levinson, D. E. Foley and D. C. Holland (eds.) *The Cultural Production of the Educated Person*, New York: State University of New York Press, pp. 273–299.
- Social Welfare Council, 2009, *Social Welfare Council*, Nepal. Available: <http://www.swc.org.np/> [2011, 0114] .
- Ulvila, M. and F. Hossain, 2002, “Development NGOs and Political Participation of the Poor in Bangladesh and Nepal,” *Voluntas: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations*, 13-2, pp. 149–163.